

# キリストの血によって

ヘブライ人への手紙 9 : 11 - 14



司祭 ヨハネ 井田 泉

2025年4月6日

大齋節第5主日

上野聖ヨハネ教会にて

先ほど大斎節第 5 主日の特祷を祈りました。

「全能の神よ、み子イエス・キリストは大祭司として来られ、その血をもって至聖所に入り、ただ一たび永遠あがなの贖いを全うされました。どうかご自身を神に献げられたキリストの血によって、わたしたちの良心を死に至る行いから清め、あなたに仕えさせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン」

だいたいどの特祷もそうですが、全体は四つの部分から成り立っています。まず神への呼びかけ、二つ目は神の救いの業についての告白、三つ目は祈願、そして最後は結びです。二つ目の救いの事実の告白と、三つ目の願いが、中心的内容となっています。今日はそれを確かめていきましょう。

まず神による救いの事実の確認・告白です。「み子イエス・キリストは……」

神のみ子イエス・キリストがわたしたちのために何をしてくださったか。三つのことを表現（告白）しました。

一つ目。み子イエス・キリストは「大祭司として来られた」。

祭司、特に大祭司は神と人々の間に立って執り成し、仲介をする存在です。神の心と言葉を人々に伝え、また人々の祈りと献げ物を神に届ける。けれども現実には、祭司、大司祭も人間ですから、弱さを持っており、過ちも犯す。ひどい場合には

人々の信仰を利用して、権力を振るい、人々を搾取し抑圧する。主イエスの時代の大祭司アンナス、カイアファがそうでした。

イエス・キリストは人間の祭司に代わって、本当の大祭司として来られた。わたしたちを神と結び合わせるために来られた。人々が神を知るようにし、神を経験させてくださる。またわたしたちの思いや願い、わたしたちの現実を受けとめて神さまに届けてくださる。わたしたちの祈りは神に届く。イエス・キリストをとおしてわたしたちは神さまと交流できる。そういう大祭司として来られた。

この大祭司キリストのことを詳しく語っているのが、新約聖書の中の「ヘブライ人への手紙」です。今日の特祷の内容全体は、実はヘブライ人への手紙の第9章の言葉に基づいているのです。後ほど読むことにします。

特祷に戻って、イエス・キリストのなされたことの二つ目。

**「その血をもって至聖所に入」**られた。

これは昔の大祭司の具体的な務めが背景にあります。大祭司は年に1回、だれも入れない神殿の一番奥の所、至聖所に入り、神に動物の血を献げて祈りました。これは本来ほんとうに真剣なものでした。軽い過ちならよいけれども、人間は時として取り返しのつかない罪を犯す。創世記に記された最初の人間の兄弟を思い出してみましよう。アダムとエバの間に生まれたのが

カインとアベルです。人類最初の兄弟として仲良くすべきであったのに、カインは憎しみと妬みのあまり、弟アベルを殺してしまう。殺されたアベルの血が土の中から神に向かって叫ぶ。恐ろしい話です。が、このような人を深く傷つけ、場合によっては命を奪うような憎しみや妬み、あるいは欲望が人類の中には、わたしたちの中にはある。そのような人類を救うためにはただ教えとか道徳とか修行ではすまない。血の罪と悲劇は、血によってしか究極的には解決しない。救えないのです。

イエス・キリストは果てしない人類の罪と争いを終わらせるために、ご自身の血を流して、その血をもって神の前にご自分を差し出された。「その血をもって至聖所に入」られた。人間が人間を、また自然を、傷つけ、命を奪ってやまないその血が罪で濁り、汚れたものだとすれば、イエス・キリストの血はこの上なく清く尊くて愛に満ちています。

それをいただくのが聖餐です。聖餐のぶどう酒が示すのはイエス・キリストの血。その血はこの上なく清らかで愛に満ちて美しく、わたしたちを清めるのです。

イエス・キリストのなされたことの三つ目。「ただ一たび永遠あがなの贖いを全うされました」。

「贖い」とはほぼ「救い」と同じですが、特別の意味合いがあります。イエス・キリストは1回限りの十字架の死によって、

血を流してご自身を神に献げることによって、わたしたちの永遠の救いを決定的に完成してくださった。「贖い」というのは、代価、犠牲を払って何かを解放する、あるいは獲得する、という意味です。神から離れていたわたしたち、憎しみや妬みやおごりに支配され、あるいは罪や自責の思いに捕らえられていたわたしたちを、イエス・キリストは身をもって解放してくださった。わたしたちを悪しき力から、神のものとして取り返してくださった、ということです。わたしたちはキリストの貴い血によって神のもの、キリストのものとなった。

このことを決定的に経験したパウロは、今日の使徒書でこう語っていました。

「わたしの主イエス・キリストを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。」

フィリピの信徒への手紙 3:8

16 世紀半ば過ぎにまとめられた「ハイデルベルク信仰問答」は、次のように始まっています。

<問 1>生きるにも死ぬにもあなたのただ一つの慰めは何ですか。

<答>わたしのただ一つの慰めは、体と魂を持つわたしが、生きるにも死ぬにもわたしのものではなく、わたしの真実なる救い主イエス・キリストのものである、ということです。

キリストは、ご自身の尊い血をもって、わたしのすべての罪

を完全に償<sup>つぐな</sup>い、悪魔のあらゆる力からわたしを解き放ってくださいました。

そして、天におられるわたしの父の御旨なしには、わたしの髪の毛一本たりとも地に落ちることにはないほどに、神はわたしを守ってくださいます。すべてのことがわたしの救いのために働くのです。

またキリストはご自身の霊によって、わたしに永遠の命を保証し、今から後、この方のために生きることを心から喜び、またそれにふさわしくなるように、わたしを整えてくださるのです。

特禱の前半、イエス・キリストの業だけで長くなりました。後半、わたしたちの願いを簡潔に確かめておきましょう。

「どうかご自身を神に献げられたキリストの血によって、わたしたちの良心を死に至る行いから清め、あなたに仕えさせてください。」

後半にも「キリストの血によって」があります。キリストの血によって、わたしたちの心を、良心を清めてください。「わたしたちの良心を死に至る行いから清め」というのは少し分りにくい気がします。けれどもこういうことではないでしょうか。わたしたちの良心が曇ったとき、損なわれたとき、ただ心が濁るだけではなく、悪しき行いを生んでしまう。良心が清められるとき、悪しき行い、間違った行動から解放される。キリスト

の愛の血が力をもって働き、わたしたちを清めてくださいますように。心を清め、愛の業を行うように成長させてくださいますように。

「あなたに仕えさせてください」。真心から礼拝を献げ、祈りと行動をもってあなたに仕えさせてください。わたしたちの生活があなたを現すものとなりますように。

この祈りがわたしたちのうちに確かなものとなって確実に神さまに届くように、イエス・キリストと一緒に祈ってくださることを願い求めます。それが結びの「主イエス・キリストによって」です。

今日の特祷の元になっているヘブライ人への手紙の言葉を読んでみます。

「キリストは、……恵みの大祭司としておいでになったのですから、……雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。」9:11-12

「もし、雄山羊と雄牛の血、また雌牛の灰が……彼らを聖なる者とし、その身を清めるならば、まして、永遠の“霊”によって、御自身をきずのないものとして神に献げられたキリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか。」9:13-14

ご一緒に今日の特禱を祈りましょう。

「全能の神よ、み子イエス・キリストは大祭司として来られ、その血をもって至聖所に入り、ただ一たび永遠の<sup>あがな</sup>贖いを全うされました。どうかご自身を神に献げられたキリストの血によって、わたしたちの良心を死に至る行いから清め、あなたに仕えさせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン」